

ビッグジュン・矢島純一の“我がボウリング人生”——前編



▲トーナメント再開時には、コロナでブレイク中に伸ばしたひげを剃って臨むつもりだ

矢島 純一

やじまじゅんいち / 1945年8月14日生まれ、東京都出身。1967年プロ入り（1期・ライセンスNo.18）。通算41勝、PBA1勝。公認パーフェクト28回。所属：中野サンブラザボウル、(株)LTB、ABS、(株)N&K

『ブームの渦中で疾走しながらもいつまで続くのか不安がありました』

74歳の今なお、ボウリング界の顔であり続けるビッグジュンこと矢島純一プロ。折からのコロナ禍でシーズンがストップしているこの機に、60年近くに及ぶボウリング人生を振り返っていただいた。

初めての出会い
高校1年生

矢島プロが所属する中野サンブラザボウルもまた、新型コロナウイルスの影響で、自粛要請に応じて4月8日から5月27日まで、休業を余儀なくされた。今年の1月ぐらいまでは、コロナに世界中がほんろうされるなんて、思ってもみなかったですね。週3回パーソナルトレーナーのところまでトレーニングは続けていましたが、それ以外ではできるだけ人に会わないようにしてこもっていました。プロ入りしたばかりのころ、腱鞘炎で8カ月ぐらい休んだけど、これだけ投げなかったのは、それ以来のことです。



▶JPBA創立記念パーティーでの矢島プロ。21歳でプロの世界に飛び込んだ

中学・高校時代と熱中していたバスケットボールを大学でも続けるつもりでしたが、家庭の事情で進学を諦めたことが、その後の人生を大きく変えることになる。

初めてボウリングをしたのは高校1年のとき。部活終わりに、

仲間7~8人とローラースケートをやるのと、スケート場のあった後樂園にブラブラと歩いて向かっていけど、何か面白そうなのができていそとのぞきにいったのが、後樂園ボウリングセンターでした。そのときに2ゲーム投げたのが、初めての体験でした。ただ高校時代はバスケットに打ち込んでいたので、ほぼそれっきりでした。

自分では大学でもバスケットを続けるつもりだったけど、親父に家業の酒屋を継げといわれて、大学を諦めた代わりといっはなんだけど、仕事の傍ら、義兄と一緒にちょこちょこ練習に行くようになった。そのころ甲州街道沿いの新宿を下りてきて、左に曲がると東京フェアレーン、右に曲がると東京スターレーンがあった。

その東京スターレーンで投げ始めたころに、同じ1期でデビューする井上望と知り合っ、よく一緒に練習をするようになった。またのちにチャーターメンバーとなる、岩上太郎さん、石川雅章さん、水谷稔さんら5人の侍といわれた猛者たちがいて、レッスンをしていました。そこで石川さんに目をかけられたことが、私がボウリングの世界に深く足を踏み入れるきっかけになりました。

晴れてデビューも
腱鞘炎との闘い

1967年1月27日、プロボウリング協会が設立された。19名のチャーターメンバーのなかには、すでにトップボウラーの

仲間入りをしていた21歳の矢島純一の名前もあった。しかしそのころには、重度の腱鞘炎で、期待と不安の船出だった。

2月に創立記念大会があって、当日の朝、痛みがひどくて行きつけの整形の先生を訪ねた。今日がデビュー戦だから、どうしても投げたいと事情を説明すると「注射をうてば投げられないことはないけど、あとが大変だよ」といわれた。それでも2本注射をうってもらって、1時間後ぐらいにはウソのように痛みがなくなっていました。

予選6G、決勝1Gの7Gトータルピンという短期決戦も幸いしたか、トータル1494ピンで優勝、JPBA最初のタイトルホルダーとなった。しかし代償も大きく、シーズンの後半はまったく投げられなかった。

いろんな方にお世話になって、あの先生がいい、この治療がいいと聞いては日本国中訪ね歩いたけど、なかなか特効薬が見つからなかった。最後にNBFのある方が、白石(雅俊・現NBF理事長)さんに「こういう整体の先生がいてすごくいいから、一度矢島さんを連れていったらどうですか」といってくれて、白石さんが「純ちゃん、一緒に行ってみようよ」と連れられて行ったのが、錦糸町にある整体院でした。

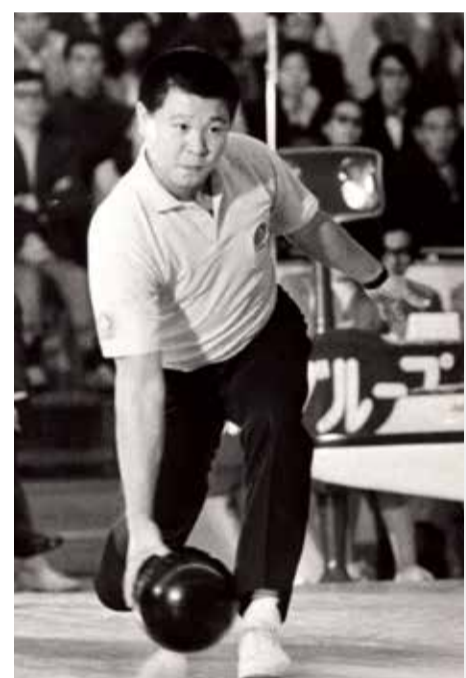
診てもらって「これは相当悪いね。私が施術すれば大体2~3回で治るけど、君のは重傷だ。原因は手首じゃなくて、肩の凝りからきている」といわれて、親指の2倍ほどにはれ上がっていた筋肉と骨をつなぐ腱を集中的にほぐしてもらった。12~13回通ったところに「もう練習をしてもいいよ」といわれて、

恐る恐る投げてみたら、痛みはずいぶん少なくなっていた。翌年の途中からトーナメントに復帰できたけど、またちょっと無理をすると、悪くなって先生に診てもらおうという繰り返しでした。完治することはなくて、いまだに練習や試合では、痛み止めや座薬が欠かせないです。

空前のブームと
突然の終焉

プロボウリング協会が設立されるころには、すでにブームといっても過言ではない状況だったが、それに拍車をかけたのは2年後、1969年の女子プロの誕生だった。ボウリング人気は沸騰、日本国中ボウリング場の建設ラッシュとなった。

自分がプロになったときは、ボウリングを広めるのが我々の使命と思っていました。それが女子プロができて、あんなことになるとは思っていませんでした。田んぼの中や山奥にもボウリング場ができて、こんなところに人がくるのかと思っていたら、そこが5時間待ち、6時間待ちというような、考えられない状況でした。私自身も当時のスケジュール帳は真っ黒でした。夜中の1時、2時まで試合をしたり、チャレンジマッチをやれば、1ボックスに10人とか入って投げるような状態でした。さすがに、こんなことがい



▲腱鞘炎にわずらわされなければ、あといくつタイトルを上げられたか

つまで続くんだろう、本当に大丈夫なのかと、不安が頭をよぎるようになっていました。

その不安どおり、ブームの終焉は突然やってくる。1973年の中東戦争を契機とするオイルショックが、日本経済を直撃。それが引き金となってボウリング場から人影が消え、最盛期に3800センターに達したボウリング場は、2年後には3分の1まで減少していた。

若いプロのなかには「ボウリングバッグを持って外を歩くのが恥ずかしい」なんて言い出す者がいて、仕事でこの道を選んだのに、そんなことをいうようでは辞めた方がいいよと怒ったこともあり。そういう私も、10代のころからボウリングしかやってこなかったもので、転身しようにも何も思い浮かばなかったんですね。でもまさか、70歳を過ぎて現役で投げ続けているなんて、そのころにはまったく想像もしていませんでした。

(次号に続く)